優秀賞 ［高校生の部］

環境の改善による モチベーションクライシスの克服

帝京高等学校3年
瀬崎（せざき） 優花（ゆうか）さん

『モチベーションクライシス』の文章中に「現在の仕事に対して無気力感を感じる人の割合が75％に達した。」とあったが私はその事実に驚いた。なぜならば私自身が既に将来つきたい職業を定めているからだ。無気力を感じるということは彼らがその仕事にやりがいを見出せないからであるという事だと私は認識し、なぜやりがいが見出せないのかと疑問に思った。また、同じく文章中の「実際には確固たる目標を見出せないでいる」と述べてある部分については私自身が確固たる目標を持っているためか、どうして目標を持つということがそんなにも現代の若者にとって困難であるのか、という疑問を抱いた。このように私は『モチベーションクライシス』には疑問を抱き、正直なところ私自身にとっては少し理解しがたいものがある。それと同時に大人や、私のようなモチベーションの高い人間と働く意欲の低下した若者達の間には大きなギャップがあり、一種の格差がおきているのだと感じた。そしてこの格差は環境によって起きると感じた。

私はこのような感想を『モチベーションクライシス』を読んだ後に持った。そして格差が環境の相違から来るのならばモチベーションの上がる環境を作ればよいと思った。以上のことから自身の経験を踏まえてこのモチベーションクライシスを防ぎ、克服するための案として二つの策を考えた。一つは若者に日常からの脱出の機会を与えること。もう一つは教育課程中に子供たちに彼らの目標を探す時間を与えることである。

まず一つ目の「若者に日常からの脱出の機会を与えること」についてである。私は現代の社会において若者たちが目標を見出せないのは彼らが厚く保護された安全ではあるが変化のない日常に取り込まれているからだと考えた。そこで私は彼らにこのぬるま湯から夢出すチャンスを与えること、具体的には彼らに諸外国へ留学し、自身の枠を広げ刺激を取り込ませる機会を与えることを提案する。例えば実際私自身米国へ1年間の留学をした。現地で様々なバックグラウンドを持った人々と触れ合い、日本の日常にいては体験できないような貴重な体験をし、そこから自分の夢を見つけた。この体験から私は若者たちに日常からの脱出口を作ってやることで自分探し症候群からの回復を図れるのではないかと思う。また、このような留学を政府等が援助することにより経済的に困難な若者も機会を得る確率が増えると思われる。やりたい仕事、目標があれば自然とセルフモチベートも上手くなりモチベーションクライシスの克服につながるのではないだろうか。

二つ目に「教育課程中に子供たちに目標探しの時間を与え、次世代におけるモチベーションクライシスを防ぐ」ことについてである。私はモチベーションクライシスの問題において最も恐れるべきことはこの危機が断続的に続くことだと感じた。そしてまだ早い段階の今の内にこの流れを断ち切ってしまうことが重要だと考えた。そこで私は教育課程中に子供達にやりたいこと探しのチャンスを与えることを提言したい。具体的には課外授業を増やしたり、職場体験学習の実施、授業の選択制化である。前の文章でも述べた通り私は米国へ留学し、そこでいくらかの教育を受けた。そこで感じたのが日本の授業は受

動的過ぎであり、画一化され過ぎているという事である。米国では生徒は自身が興味を持った科目を選択し、自分なりのカリキュラムを組んでいる。そのためか私の現地での友達は皆やりたい事が決まっていた。また課外学習やボランティア活動も豊富で様々な物事に触れることが出来た。しかしながら日本では生徒・児童は用意されたカリキュラムを淡々とこなし卒業するだけである。これでは目標を決めることはやや難しいように思う。加えて先日社会科の授業で板橋区民の方々と「働く」ということに話し合ったがその中で働くということは社会のために何かをすることであるという結論が出た。しかし現在の画一的な日本の教育を受けただけでは自分が社会の一員であり、また社会に必要とされているという事を感じ取れないのではないか。このことからも積極的に課外学習などを取り入れる事で若者に社会への必要性を教えることができ、結果それがモチベーションの増加につながると思う。

私は以上二つの事によってモチベーションクライシスを解決、克服できると考えた。私は幸運にも恵まれた環境にいたために現在の時点で確固たる目標を持つことができているが大半の若者はそうではない。更に彼らは非常に消極的で彼らからの動きを待っていても進展は望めそうにない。故にこちら側が積極的に目標探しの場や環境を提供することが効果的であると私は考える。